

カミュ全集 4

ペスト

カミュ全集 4

編集／佐藤 朔・高島正明

新潮社版

AC

カミュ全集 4

Œuvres Complètes d'Albert Camus, Tome V

Original Copyright : ÉDITIONS GALLIMARD

This book is published in Japan by arrangements with
Gallimard through the Bureau des Copyrights Français.

印刷 1972年12月1日 発行 1972年12月5日

発行者 佐藤亮一

翻訳者 宮崎嶺雄

装幀者 高松次郎

発行所 株式会社 新潮社 〒162 東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)260-1111(大代) 振替東京808

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 神田加藤製本所

定価850円

〈乱丁・落丁本はおとりかえいたします〉 Printed in Japan 1972

◇目次◇

ペスト 宮崎嶺雄 5

『ペスト』拾遺 宮崎嶺雄 257

解題 258

カ
ミ
ユ
全
集
4

ペ

ス

ト

ある種の監禁状態を他のある種のもので表現することは、何であれ実際に存在するあるものを、存在しないあるものによって表現することと同じくらいに、理にかなったことである。

ダニエル・デフォー

この記録の主題をなす奇異な事件は、一九四*年、オランに起った。通常というには少々けたはずれの事件なのに、起った場所がそれにふさわしくないというのが一般の意見である。最初見た眼には、オランはなるほど通常の町であり、アルジェリア海岸におけるフランスの一県庁所在地以上の何ものでもない。

町それ自身、なんとしても、みずぼらしい町といわねばならぬ。見たところただ平穩な町であり、地球上どこにでもある他の多くの商業都市と違っている点に気づくためには、多少の時日を要する。どういえば想像がつくか、たとえば、鳩もおらず、樹木も庭園もない、鳥の羽ばたきにも木の葉のそよぎにも接することのない町、いってしまえば一個の中性の場所というような町である。季節の変化もここでは空のなかにしか認められない。春はただ空気の質に

よって、あるいは小さな売子たちが近在からまた持って来始める花籠はなごによって、それと知られるばかり。つまり市場で売っている春である。夏の間は、太陽が乾燥しすぎた家を燃え上らんばかりに熱し、鼠色の灰で壁をおおう。そうなると、もう鎧扉よろいを閉めきつた薄暗がりのなかでしか暮せない。秋には、逆に、どろの洪水である。美しく晴れた日は冬にだけ訪れる。

ある町を知るのに手頃な一つの方法は、人々がそこできかに働き、いかに愛し、いかに死ぬかを調べることである。われわれのこの小さな町では、風土の作用か、それがすべて一緒くたに、みんな同一の狂熱的でしかもうつろな調子で行われる。という意味は、人々は、たいくつしており、そして習慣を身につけることにこれ努めているのである。

わが市民諸君は大いに仕事をするが、しかし、それは常に金持ちになるためである。彼らは特に取り引きに関心が深く、そしてまず第一に、彼らの表現に従えば、事業を行うことに専心する。もちろん、かの単純な喜びにも興味をもち、女や映画や海水浴を愛する。しかしきわめて分別よく、楽しみは土曜の晩と日曜のためにとっておき、他の週日には大いに金をもうけようと試みる。夕方、事務所がひけるころには、きまつた時刻にカフェに集まり、同じ大通りを

散歩し、もしくはわが家のバルコニーに身を置く。若手の連中の欲望は荒っぽく、かつぶつきらぼうであり、一方、年輩の連中の悪徳も、ボーリングの同好会や、懇親会の会食や、カルタの運に大金をかけ合うクラブなどの域を出ない。

おそらく、こういうことはわれわれの町に特有のことではなく、結局、現代の人々はすべてそんなふうなのだというかもしれない。確かに、人々が朝から晩まで働き、さてそれから、生きるために残された時間を、みずから選んでカルタに、カフェに、またおしゃべりに空費する光景ほど、こんにち、自然なものはない。しかし、人々が時おりはまた別なものの存在をそれとなく感じてもあるような、町や国もある。一般には、それが彼らの生活を変えはしない。ただ、それにしても、感じることは感じたのであり、常にそれだけの収穫にはなっている。オランはこれに反して、明らかにそんな感知など存在しない町、換言すれば全く近代的な町である。したがって、この町で人々が愛し合うその愛し方を明確に描くことは、かならずしも必要でない。男たちと女たちとは、愛欲の営みと称せられるもののなかで急速に食い尽し合うか、さもなければ、二人同士のながい習慣のなかにはまり込むかである。この両極の間に、中

間というものはそう見かけない。これもまた特異なことではない。オランでも他のところでも、時間と反省がないままに、人々はそれと知らずに愛し合うことをいかにも余儀なくされているのである。

この町でそれ以上に特異なことは、死んでいくのに難渋を味わうということである。もつとも、難渋というのは適当な言葉でないし、非快適というようないかたのほうにさらに適切かもしれない。病気をしているのはいかなる場合にも愉快なものではないが、しかし、病気のなかで身をささえてくれ、ある意味でのんびり羽を伸ばしていられるような、そういう町や国もある。病人というものは優しさを欲し、好んで何かによりかかりたがるというのは、きわめて自然なことである。ところが、オランは、気候の激しさ、人々の営む事業の重要さ、装飾的なものの乏しさ、夕暮れの過ぎ去る速さ、それから楽しみというものの質など、すべてが健康を要求している。病人はこの町ではまったくひとりぼっちである。暑さに弾けそうな幾百の壁の陰で穿ウツに挿えられ、死んでいこうとしているものと、一方、その同じ瞬間に、電話口やカフェで、手形や船荷証券や割引について話し合っている全住民とをここで考えてみるがいい。死というものが、近代的な死さえも、こんな具合に無味乾

燥な場所で饜つた場合には、そこに快適ならざるものありうることが理解されるであろう。

以上幾つかの指摘だけで、われわれの町の姿を想像させるにはおそらく十分であろう。かつまた、何ものも誇張すべきではない。強調する必要のあったのは、町と生活との月並に見える点である。しかし、人は習慣を身につけると、たちまち困難なくその日を送るようになるものである。われわれの町がまさにその習慣というものにあつらえ向きな町であるからには、万事上乘の成り行きといふこともできる。こういう角度からすれば、確かに、生活といふものは、そう情熱をかき立てるようなものではない。少なくとも、われわれの町では、混乱といふようなものは見かけたことがない。そして、率直で、感じがよく、活動的なわが住民諸君は、常に旅行者の胸にそれ相應の敬意を呼び起したものである。美観もなく、植物もなく、精神もないこの町は、結局、心の休まるものに見え、ついに人々はここで眠ってしまう。しかし、この町が、非のうちどころのない描線を描いている湾の前面、明るい丘に囲まれた裸の台地の中央に位し、絶佳の風景に接続していることは、付け加えておくのが公平である。ただ、惜しむらくは、その湾に背を向けて町が建てられ、したがって、海の姿を見ることができ

ず、いつもわざわざ見に行かねばならぬことである。

ここまで来れば、容易に納得されるであろうが、わが市民諸君にとって、その年の春起つた種々の出来事など、これを期待させうるようなものは何ひとつなかったのであつて、しかもそれらの出来事こそ、やがてわかつたことであるが、ここにその記録をつづろうと思ひ立つた一連の重大事件の最初の兆候ともいふべきものであつたのである。これらの事實は、ある人々にはいかにも自然なことに、またある人々には、反対にとてもありそうもないことに見えるであろう。しかし、結局、記録作者といふものはそういう矛盾を顧慮してはいられないのである。彼の仕事は、「こういうことが起つた」と——こういうことが事実起り、それが一住民全体の生活に係り、したがって彼のいうことの眞実性を自身の胸で評価しうる証人が数千もあるということのみずから知っている場合に——ただ、そう言うことである。

かつまた、この筆者は、結局遅からざる時期にその何者であるかがわかるであろうが、もし偶然の事情である数の供述を採録できる状況に置かれなかつたならば、そして事件の圧力により、以下述べようとするすべてのことに自らかかり合う羽目に陥らなかつたならば、この種の企てにお

いてひけらかしうる肩書などほとんどなかつたはずの者である。このことが、すなわち歴史家のごとくふるまう権利を彼に与える。いうまでもなく、歴史家というものは、たとい素人にせよ、必ず資料というものをもっている。この物語の筆者もしたがって自分のそれをもっている。まず彼自身の実見したことが、次に他の人々のそれ——というのは、彼自身の役割からして、彼はこの記録中のすべての人物の打ち明け話を聞くことになるのであるが——そして最後に、結局彼の手に渡ることとなつた各種の文書。彼は、適当と思ふ場合にはそのなかから引用し、そして意のままにそれを利用するつもりである。さらにまた彼のつもりでは……。しかし、おそらくもう注釈や、言葉による前置きなどは捨てて、物語そのものにはいるべき時であろう。最初の数日の叙述は多少微細にわたる必要がある。

四月十六日の朝、医師ベルナル・リウーは、診療室から出かけようとして、階段口のまんなかで一匹の死んだ鼠につまずいた。咄嗟に、気にもとめず押しつけて、階段を降りた。しかし、通りまで出て、その鼠がふだんいそうもない場所にいたという考えがふと浮び、引返して門番に

注意した。ミッシェル老人の反発にぶつかつて、自分の発見に異様なもののあることが一層はつきり感じられた。この死んだ鼠の存在は、彼にはただ奇妙に思われただけであるが、それが門番にとっては、まさに醜聞となるものであつた。もつとも、門番の論旨ははつきりしたものであつた——この建物には鼠はいないのである。医師が、二階の階段口に一匹、しかも多分死んだやつらしいのがいたといくら断言しても、ミッシェル氏の確信はびくともしなかつた。この建物には鼠はいない。だからそいつは外からもつてきたものに違いない。要するに、いたずらなのだ。

同じ日の夕方、ベルナル・リウーは、アパートの玄関に立って、自分のところへ上つて行く前に部屋の鍵を捜していたが、そのとき、廊下の暗い奥から、足もとのよろよろして、毛のぬれた、大きな鼠が現われるのを見た。鼠は立ち止り、ちよつと体の平均をとろうとする様子だったが、急に医師のほうへ駆け出し、また立ち止り、小さななき声をたてながらきりきり舞いをし、最後に半分開いた唇から血を吐いて倒れた。医師はいつときその姿をながめて自分の部屋へ上つた。

彼が考えていたのは鼠のことではなかつた。鼠の吐いた血で、自身の心配ごと引きもどされたのである。一年以

来病んでいた彼の妻は、山の療養所へ明日たつことになっていた。帰ってみると、妻は、彼にそういわれたとおりの居間のほうに寝ていた。そうやって、転地の疲労に備えているのであった。彼女はほほえんだ。

「とても気分がいいの」と、彼女はいった。

医師は、枕もとの電燈のあかりのなかで、自分のほうへ向けられた顔をながめた。リウーにとつては、三十になり、病の寝れさえありながら、この顔はいつでも若いころのそれであった。おそらく他のすべてを消してしまふ、その微笑のためであろう。

「できたら眠るといいな」と、彼はいった。「看護婦は十一時に来るから、そうしたら十二時の汽車に連れてってあげるよ」

彼は軽く汗ばんだ額に接吻した。微笑が戸口まで追って来た。

翌四月十七日、八時に、門番は通りかかった医師を引きとめて、悪ふざけをするやつらが廊下のまんなか死んだ鼠を三匹置いて行ったと訴えた。きつと大きな鼠でとつたものに違いない、なにしろ血だらけだ。門番は鼠の足をぶらさげてしばらく入口の闕の上に突っ立ったまま、犯人どもが進んで正体を現わす気になつて何か嘲弄の言葉でもあ

びせかけてきたらと待ち構えていたのだった。だが、一向なんの気配もなかった。

「まったく、やつら」と、ミッシュェル氏はいつていた。

「最後にや、とつつかまえてやるぞ」

何かいやくありそうな気がして、リウーは、患者のうちでいちばん貧しい人たちの住んでいる外郭の地区から往診を始めることにした。塵芥集めがその地区ではずっと遅くなつてから行われ、そのまっすぐなほこりっぽい道を行って行く自動車は、歩道の縁に放置された芥箱をすれすれにかすめるのであった。そんなふうにして通つて行つた一つの通りで、医師は、野菜くずやよごれた襪の上に投げ出された鼠を十二匹ぐらい数えた。

訪ねた最初の病人は、道路に面した寝室と食堂を兼ねた部屋で、床についていた。これは、落ちくぼんでいかつた顔をした、年寄りのイスパニア人であった。彼は自分の前のふとんの上に、豌豆のいっぱい入つた鍋を二つ置いていた。医師がはいつて行つたとき、ちょうど病人は半ば身を起して、うしろへそり返りながら、喘息病みの老人のごろごろする息づかいを回復しようと試みているところであった。細君が洗面器を持って来た。

「どうです、先生」と、注射の間に彼はいつた。「やつ

らの出て来るこたあ。見ましたから」

「そうなんですよ」と、細君はいった。「お隣じゃ三匹も見つけたんですとさ」

爺さんほもみ手をしながら——

「出て来るのなんのって、芥箱って芥箱にはみんないまさあ。こいつは飢饉きんですぜ」

リウーが、それに引き続いて、その界限かぎじゅうが鼠のうわきをしていることを確かめるのには、たいして手間はかからなかった。往診が終って、家へ帰って来た。

「あなたに電報が来てますぜ、階上えいじょうに」と、ミツシエル氏がいった。

医師は、また鼠を見つけたかと尋ねた。

「見つけるもんかね」と、門番はいった。「こっちは見張ってます、ちゃんとね。で、あんちくしょうども、やれないんです」

電報はリウーに母が明日着くことを知らせたものであった。病人の留守中、息子の家のめんどろを見に来るのであった。医師が家へはいると、看護婦はもう来ていた。見ると、妻はちゃんと起きて、テイラード・スーツのいでたち、化粧のあとまで見せていた。彼はそれにほえみかけ

「ああ、いいな」といった。「とつめさよ」

それから間もなく、停車場で、彼女を寝台車に乗り込ませた。彼女は車室を見まわした。

「たいした料金なんでしょう、あたしたちの身分じゃ。そうじゃない？」

「必要なことだもの」と、リウーはいった。

「いったいどういんですの、今度の鼠さわざは」

「わからない。まったく奇妙だ。だが、そのうち済んじまうだろう」

それから、彼はひどく口早に、彼女に向って、どうかゆるしてくれるように、ちゃんと気をつけてやるべきだったのに、ずいぶんほったらかしにしていると、いった。彼女は、なんにもいわないでというように、首を振っていた。しかし、彼は付け加えた——

「何もかもよくなるよ、今度帰って来たら。お互いにまたもう一度やり直すさ」

「ほんとうよ」と、目を輝かせながら彼女はいった。「やり直しましよね」

それから間もなく、彼女は彼に背を向け、窓ガラスの外をながめていた。ホームの上では、人々が急ぎ合い、ぶつかり合っていた。機関車のシュッシュュツという音が彼らの

ところまで聞えてきた。彼は妻の呼び名を呼んだが、振り向いたのを見ると、その顔は涙におおわれていた。

「だめだなあ」と、やさしく彼はいった。

涙の陰から、やや引きつったように、またほほえみが浮んできた。彼女は大きく息をついた。

「行っておいで。万事うまく行くよ」

彼は彼女を抱きしめ、そして今はもうホームに立って、窓ガラスの向う側に、ただ彼女のほほえみを見るばかりであった。

「くれぐれも体につけてね」と、彼はいった。

しかし、彼女には、それは聞えなかった。

出口に近く、駅のホームで、リウーは予審判事のオトン氏が小さい男の子の手を引いているのにつかつた。医師は、彼に旅行に出かけるのかと尋ねた。長身黒髪のおトン氏は、半ばはかつて社交界の人士と呼ばれたものに似、半ばは葬儀人夫に似た風采ふうさいであったが、愛想のいい、しかしぶつからばうな声で、こう答えた。

「家内を待ってるんです。私の実家にこ機嫌うかがいに行ってみましたので」

機関車の汽笛が鳴った。

「鼠が……」と、判事がいった。

リウーは汽車の方角へちよつと身を動かしたが、また出口のほうへ向き直った。

「ええ」と、彼はいった。「なに、なんでもありませんよ」

この瞬間について記憶に残ったことといえば、死んだ鼠のいっばいはいった箱を小脇にかかえた一人の駅員が通ったということだけであった。

同じ日の午後、診察時間の初めに、リウーは一人の若い男の訪問を受けたが、それは新聞記者で、すでに朝のうちにも訪ねて来たということであった。名はレイモン・ランペールといった。胸が短く、肩は厚く、はっきりした顔つきに、明るく聡明な眼をしたランペールは、スポーツ仕立ての服を着、生活には不自由のない人間らしく見えた。彼は単刀直入に切り出した。パリのある大新聞のために、アラビア人の生活条件について調査をしているところで、彼らの衛生状態についてききたいというのである。リウーはそれに対して、そのほうの状態はよくはない、といった。しかし、それ以上話を進める前に、いったい新聞記者というものはほんとうのことをいえるのか、それを知りたいといった。

「もちろんです」と相手はいった。

「僕のいう意味は、全面的にやつつけるということまで

行けるかということですよ」

「全面的とは行きません。それはどうしてもそうなんです。しかし、そのやっつけるというのは別に根拠はないことなんですよ」

穏やかな調子でリウーはそれに答えて、いかにもそんなやっつけるなどということは根拠のないことであろうが、しかしその質問をしたのは、ただランベールの証言が留保のないものでありうるか否かを知ろうとしたのだ、といった。

「僕は留保のない証言しか認めないんです。ですから、あなたの場合にも、僕の報告を提供することはしません」

「まさにサン・ジュストの言葉ですね」と、ほほえみながら新聞記者はいった。

リウーは、それに対して別に声の調子を高めることもなく、その点はどうか知らないが、これは自分の暮している世界にうんざりしながら、しかもなお人間同士に愛着をもち、そして自分に関する限り不正と譲歩をこばむ決意をした人間の言葉である、といった。ランベールはじつと首をすえて、医師の顔を見つめていた。

「あなたのお気持ちにはわかるような気がします」と、立ち上りながら、最後に彼はいった。

医師は戸口へ送って行った。

「あなたがそんなふうに受けとってください、僕もうれしいんです」

ランベールは、じれったそうにした。

「ええ、わかってます」と、彼はいった。「おじゃましてすみませんでした」

医師は彼の手を握り、そして、目下市内で発見されている大量の死んだ鼠について興味ある報道記事をものするこ
とができるだろう、といった。

「ほう！」と、ランベールは声をあげた。「そいつはおもしろいですね」

十七時に、医師がまた往診に出かけようとする、階段の途中で、がっしりと彫りの深い顔に濃い眉毛を一文字に引いた、姿全体に重々しさのある、まだ若い男とすれ違った。その男には、時おり、このアパートの最上階に住んでいるイスパニア人の舞踊師たちのところで出会ったことがあった。ジャン・タルーは、しきりにたばこをふかしながら、足もとの階段の上で死にかけている一匹の鼠の最後の痙攣をながめていた。彼は医師のほうへ、その灰色の眼の落ち着いた、やや見すえるような視線をあげ、挨拶の言葉をいい、そしてこの鼠どもの出現は興味あることがらだと